

短編集

白き きり に ぬい

かつおきんや作

梶山被夫画





N. D. C. 913/232P/23cm = 菊判

かつおきんや作品集 3

■ 白いにぎりめし ■

一九七三年四月三〇日 一版発行
定価 六五〇円

著者 かつおきんや

発行者 牧 芳 枝

発行所 株式会社牧書店

郵便番号 一六二

東京都新宿区揚場町一

電話(〇三)二六九一(〇八一

振替 東京一九六四八三

印刷 第一印刷

製本 ナショナル製本

・乱丁本・落丁本はおとりかえいたします

©Kinya Katsuo 1972 Printed in Japan

(分) 8393 (製) 08003 (出) 7909





65

9



鉄砲水

187

くま

149

へび

115

装丁・さし絵 梶山俊夫

一九三五年、東京に生まれる。武蔵野美術大学中退。日本大学芸術学部卒業。一九六〇年、シエル美術賞受賞。その後渡欧し帰国後全国の奈良時代廃寺、国分寺跡を歩く。主な仕事に「ごろはちだいみょうじん」「おんちよろちよろ」(共に福音館)「千本松原」(あかね書房)「雲取谷の少年忍者」(学研)などの他、牧書店発行のものに「トキのいる山」「生きていく民話」「ズリ山」「海がめくる浜」「瀬田の唐橋」「児童文学同人誌シリーズ(全8巻)」など、二十数冊ある。

この本の作者による「井戸掘吉左衛門」「安政五年七月十一日」(共に牧書店)にもユニークな絵を描いているが、かつおきんや作品集も全巻の装丁・さし絵を担当する。

現住所 千葉県市川市中山町二一七―二〇

短編集
白
い
ぎ
め

湯淺丈太郎

湯浅丈太郎は、おとなしい学者だった。

文政十二年（一八二九）秋、加賀の国能美郡小松町にある藩の学校、習学所の教授になったとき、学生たちへの最初のあいさつがこうだった。

「私は、これまで何回か『論語』を読み返してきましたが、今もって、なっとくのいく解釈のできないところだらけです。いっしょに読んでいきましょう。」

かみに白いものがまざり、腹がいくらか出はじめて、全体がやわらかい感じのからだに、細い声だった。あとで学生の一人が、

「先生、さっき『何回か読み返してきた』といわれましたが、何十回かのまちがいではございませんか。」

と聞くと、まじめにうなずいて、

「そういった方がいいかもしれません。月に三回は読み通します。十歳のときからの習慣です。」

と答えた。このとき四十歳であったから、三十年間でどれだけになるだろう。

とにかくかえめな男であった。

二、三日して学生の一人が大声でかげ口をいつているのが聞こえた。

「上田先生うえだのような方は、これんのかなあ。」

上田耕こう、通称作之丞つうしょうさくのじょう。丈太郎の二歳年上さいで、才氣さいきにみち、經濟けいぎを論ろんじて当時藩はんで右に出る者はいなかった。文政七年まで三年間、この習学所しゅうがくじょで教えるあいだ、小松の人びとはすっかり傾倒けいとうしてしまった。もともと織物おりものの町で、利りにさとく、武士も町人もおとこ氣きの強い土地であったから、上田作之丞かみづけつかんのような熱血漢ねつけつかんは大いにうけた。作之丞は小松から金沢かなざわへ出、文政九年からは自分で塾じゅくを開いて、時勢じせいを論ろんじ、政治せいじに関する意見をズバズバと主張しゅちやうした。そのため、当時の実力者である家老かろうの奥村栄実おくむらのでさねには、けむたがられ、いやな目で見られたが、かえって、そういう作之丞さくにあこがれる若者は多かった。それが声になって出たのである。

だが、学生たちのそのような期待に対しても、丈太郎はわずかに首をふるだけであった。

「あの人はあの人、私は私だ。」

こうして、習学所教授しゅうがくじょうじゅになった丈太郎は、いたって平穩へいおんな月日を送っていた。もともと生まれ故郷こきやうであり、うそもおべつかもつかぬ正直しやうじきな人からは敵てきをつくらなかったから、丈太郎自身、住み心地がよさそうだった。

だが、世の中には、寒風が吹き荒あれていた。文政十三年十二月に変わった天保てんぽうという年代は、不作ふさくの連続れんぞくであった。とりわけ、四年、五年は、二年つづけて天候てんこうが悪く、ひどいきき

んになった。こじきがあふれ、伝染病で死ぬ者はかぞえきれないほどであった。

上田作之丞は、城下町金沢で、自分の塾生や、その説を支持する武士たちで、黒羽織党というグループをつくり、藩の政治をきびしく攻撃した。だが、丈太郎は、それを学者らしくか
らぬおそろしい行動だと思って見ていた。藩としては、その立場から、非人小屋をたくさん
建てたり、町まちでおかゆの給食をしたり、疫病よけのお祈りを寺でさせたり、医者を各
郡に送ったりしていたが、丈太郎はそれをよく努力していると思っていた。

凶作になるのも、豊作になるのも、すべて天命である。その天命の下で、それぞれが自分
のつとめをつくす、それで世の中はうまくいくのだ。自分はこの学校につとめる学者であつ
て、三千年来伝えられている孔子、孟子の教えを、できるかぎり正しく学生に教えるのが、
つとめである、だから、政治や経済にくちばしを入れるのは、学者らしくない、出すぎた行
ないだ。そう考えて、まことにつつましくかに生きてきたのだった。それが丈太郎の腹の底
にひめられた信念だった。

ところが、この丈太郎の信念を、根底からくつがえす事件が起きたのだ。

天保七年（一八三六）八月一日のできごとが、そのきっかけであった。

この年は、五月のつゆどきになっても、さっぱり雨が降らず、それでいて、空はどんより

とくもっていて寒い。からだの底からこごえてくるような寒い日がつづいていた。四年、五年の天候と、まったくいっしょだった。

「ことしも凶作じゃ。」

「たいへんなことになるぞ。」

そういううわさが、早くも五月の中ごろには起きてきた。そして、そのうわさのひろまりと同じ速さで、米のねだんが少しづつあがっていった。

六月になっても、相変わらず寒く、雨は降らない。うわさは具体的になった。

「本吉やら小松やらに、米を買いしめとる商人がおる。」

「あいつら、もうすぐ打ちこわしにあうぞ。」

「本吉じゃ、四軒、小松じゃ六軒やそうな。」

このうわさをうら書きするように、六月六日の夜には、金沢で笠舞屋という米屋が打ちこわしにあい、六月二十日には大野の米屋がやられ、七月十日すぎには、宮腰の錢屋五兵衛の家へ、付近の村や町の女どもが、大勢して押しかけ、口ぐちに、

「米くれいや。」

と叫ぶ。それが三日もつづいて、とうとう役人が出て追いはらった、という話も風にのって伝わってきた。

七月（今のこよみでいうと、ほぼ八月にあたる。）といえ、一年で一番暑い時期のはずなのに、あ、わ、せを着なければならぬほど、寒い。田んぼを見ても、穂のつかない青草ばかりが、一面に風にそよいでいるばかり、あぜにうえた大豆さえ、さやはできて、ペシャンコだ。

米のねだんは、日ごとにあがる。ふつうの年なら一升六、七十文なのに、このごろでは百十文から二十文。それにつれて、日用品から何から、物のねだんが何もかもあがる。

「ええい、やけくそや。」

と、朝から酒のにおいをさせたやつが、町の中をわめいて歩く。

「打ちこわしは、今夜か、あしたの晩やといや。本吉じゃ、明翫屋に新村屋が、もう決まったそう。小松じゃ、どこやろなあ……。」

こんな男がいても、だれも、とり押さえもしない。七月末になると、だれもかもが、打ちこわしを待ち望むような気分になってきた。

そしてそのうわさの通り、小松から一里（約四キロ）ほど離れた隣町の本吉で、新村屋をはじめとする四軒の米屋がおそわれたのは、七月三十日の夜だった。

これは、名指しのうわさにおそれなした新村屋など町年寄が、町奉行所へ「何とかしてほしい」と頼みに行った、そしてはねつけられて引きさがった、その夜のできごとだった。

五つ半（午後九時）ごろ、二、三百人の男たちが、どこからともなく近くの松林にあらわれ、

正寿寺の鐘を合図に次から次へと米屋へ押しかけ、はこび出した米を往来にぶちまけ、家の中をさんさんに打ちこわし、四軒すますと、さっと引きあげて行ったのだ。

翌日、小松では、夜の明けぬうちからこの話で持ちきりだ。合いことばが「百八文」「は、そうかいな」であったとか、二軒めにおそわれた紺屋三郎兵衛が、「話せばわかるはずや。待ってくれ」と立ちはだかったため、からだじゅうをなぐられて、身動きできんようになったとか、郡奉行所から与力二人につれられて、足輕などが百人ほどかけつけたのだが、ついたときにはあらしはとくに過ぎたあとで、本吉の人たちから、「何しにきたんや。あとかたづけをしにきたんか」と、ひやかされたとか……。

丈太郎のいる習学所でも、ざわついていて授業どころではない感じだった。金沢などちがって、小松や本吉は小さな町だから、たとえ一軒おそわれても、大事件になるのだ。そのふんいきにまきこまれたのか、いつになく丈太郎自身も、おちつかない気分だった。

「打ちこわしなどということは、いったいだれがやるものだろう。それに、本吉では米を道にまきちらしてふみつけたというが、くうに困るのなら、銭屋へ押しかけた宮腰の女どものように、持ってもどればよいものを、なぜだろう。」

こんな疑問が、一日じゅう何度も頭に浮かんだ。しかし、学者として、口にしてはならぬことだという感じがして、だまって、自分の腹の中におさめておいたのだった。